

実朝の独創性 ―『百人一首』入集歌を根底に(後編)―

早川 昌成

【後編】はじめに

前回は、源実朝の「世の中は常にもがもな渚漕ぐ海士の小舟の綱手かなしも」の歌について述べた。この歌は恋に関わる語が多用され、『定家本』の前後の歌からの関連からも男女の行く末の如く、また「舟」の浮き沈みの如く不安ではかなき世を生きねばならぬつらさを主題とした歌と考えられる。愛情不変を想い、世の常を願う実朝の心の表出とみる。

『定家本』の当該歌を含む一連四首は「葦」「舟」「千鳥」「鶴」の題で、「難波潟」から「葦」「濁ゆく」舟」「跡無き波」「沢辺の葦鶴」と発想の連関が可能であり、これを「世の中」「舟」「鳴く」のイメージで繋ぐ。当該歌は実景に着想を得つつも「難波潟」の題詠の一連かとさえ思う。題詠にも「自然」と「人事」の一体化した歌には、実朝の思いが素直に發揮された佳作も多い。その意味で「世の中」の歌は実朝という歌人の本質が最大限に凝縮された歌であり、その点を定家は見逃さなかったとみる。

こうした実朝の佳作を述べるに先立ち、今回も「自然」と「人事」が一致した成功例を現代短歌から引く。

早朝の自転車小屋はランデブー羽を光らす
二匹のトンボ

チューイングガム風船を膨らます君への秋
はかく膨らめり
捕まえたペルセウス座流星群君と観るまで
冷凍保存

いつだって坂道共に歩みつつ呼吸している
私のローファー
我が肺の奥に棲みたる蝶ありて君の声聴き
羽はたたかす
君のため焼きゆくホットケーキには天使の
羽をひそませておく
渦巻ける短調の雲群れゆきて十八歳の不安
を曝す

すべて同一作者(高校生)の一連で、金沢大学第1回「超然文学賞」優秀作品(次賞)となった作品群から抜粋した。選者からは「何かを信じる心」をストレートに描ききっており、現代はこの心を追求めることが難しい。比喩の使い方にきらめきがあり、定型をよく体得している。」と評された。

また「自然」と「人事」ではないが、この作者の比喩力は、流浪する君宛てだった言の葉を沈没船のよう
うに眠らす

の歌にも發揮され、「全国高等学校文芸コンクール」で優良賞を受賞した。合評会で選者からは「比喩はこの歌がピカ
一」と評された。

右に挙げた作品群は、自然を擬人的に扱いつつながら、その中に高校生のナイーブな心を自己の独創として昇華させている点で優れた作品と言える。それに伴う比喩のテクニクも抜群で、この手法は実朝歌の本質にも通じるものと思う。

一 実朝の獨創性

「自然」と「人事」の一体化にこもる実朝の人間的な情愛の心は

ものいはぬ四方の獸すらだにもあはれなる
かなや親の子を思ふ

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき
子の母を尋ぬる

といった作品に率直に歌われる。万葉調ではあるが、万葉にない「かなしみ」と中世的な哀感に満ちている。「かなし」という形容詞を用いることなく独自の「かなしみ」を表出している。「いとほしや」の初句切れ、三句切れの繊細で感傷の稚拙さすら思わせるリズムは万葉の模倣にあらぬ実朝のオリジナルである。前述の「世の中は」の歌に両親や兄の情愛を望む心を見ることは直接にはできないが、これらの二首は

先述の「葦」「舟」「千鳥」「鶴」に続いて配置されており、実朝の親子の愛しみの心が吐露された歌である。

また「世の中」の語を用いた歌では

とにかくにあなさだめなの世の中や喜ぶ者
あれば侘ぶる者あり

という歌もある。水のごといや澄み渡る実朝の心、下句の対の表現は管見では見あたらない。事実を直裁的に詠みながら両者のどちらにもナイーブな共感がある。また『金槐集』にはないが、やはり「世の中」の語を用いた

世の中は押して放ちの相違なく思ふ矢筋よ
神もたがふな

という歌が鶴岡八幡宮に伝わる実朝の詠草として遺されている。よいリズムではなく、「放ち」の名詞形も独特だが、これぞ実朝の肉声で歌われた歌である。「世の中は常ならざる」と口にせずとも、その思いは言外に痛いほど溢れており、為政者としての儀礼を超えた力強い意志と実朝の心を感じる。実朝の純粹で優しい心は、常に他者と同化し、相手の気持に立つて歌う。「老い」の悲しみは、齡九十を過ぎてやって来た「朽法師」の立ち居のままならぬ思いそのままに

道遠し腰はふたへに屈まれり杖にすがりて
どここまでも来る

と老の心を率直に歌う。またあるときは

旅を行きしあとの宿守おのおのに私あれや
今朝はいまだ来ぬ

と二所詣下向の翌朝、まだ現れない家臣達の事情を思いやる

気持ち素直に歌う。

実朝の優しい人間らしい心は、伝説上の人物にも及ぶ。

夕されば秋風涼したなばたの天の羽衣たち

やかふらむ

薄い天の羽衣では寒いだろうとするナイーブな同情の心は先述の「ものいはぬ」「いとほしや」と同次元に置くことができる。また実朝は橋姫伝説にも関心深く、

片敷きの袖こそ霜に結びけれ待つ夜更けぬ

宇治の橋姫

狭菴にひとりむなしく年も経ぬ夜の衣の裾

あはずして

狭菴に幾よの秋を忍び来ぬ今はた同じ宇治

の橋姫

と橋姫の思いに立った歌を残している。『袖中抄』では橋姫も本来「年頃なりける」男女二神であったとあり、その「かなし(愛し)」きに実朝は思いを深くしていたものであろう。先述の高校生の「チューイングガム」ではないが、実朝は季節をも擬人化して歌う。

ことしげき世を逃れにし山里にいかに尋ね

て秋の来つらむ

人里離れた山奥まで、やってきた「秋」にどうやって探し当てて来たのかと「秋」に呼びかけている。

頼め来し人だに訪はぬ故郷に誰まつ虫の夜

半に鳴くらむ

頼みにさせてきた人さえ訪ねてこない故郷に、松虫は誰を

待って夜更けに鳴いているのか。「まつ」には「待つ」と

「松」が掛けられているが、松虫の鳴き声という自然を自己の悲しみに見事に合致させている。主観を客観に変える実朝の力である。

「世の中は」の歌を始め、実朝の人への優しさを述べてきたが、その実朝が四季の推移に孤独と無常を思う時は恐い。

春といひ夏と過ぐして秋風の吹上の浜に冬

は来にけり

秋は去ぬ風に木の葉は散りはてて山寂しか

る冬は来にけり

巡る四季の時間の早さ、四季の順を並べただけの当然、つ

まらぬ歌に見えるが、「即物」ではない冬の訪れの独自の「描写」に、実朝の悲しみの涙は光り、そこに無限のニュアンスが漂う。これぞ実朝の独創たる「無常」である。

冬の次は新年がやってくるが、
はかなくて今宵あけなば行く年の思ひ出も

なき春にやはなむ

の歌にはゾツとする。正月を待つ気分のかけらもない。「何の思い出もない去年だったと思う新年が来る」、十代二十代の青年が、このような発想をするかと驚く。

実朝の独創性は、

空や海海や空ともえぞ分かぬ霞も波も立ち

満ちにつつ

といった、仰ぎ見るような雄大なスケールで歌う叙景歌にも認め得るが、本質は表現や調べに未熟な点はあるとも、率

直に心情を吐露した歌にある。従来の実朝論は定家が実朝に与えた影響という観点から論じられてきたが、逆に実朝が定家に与えた影響もあろう。『愚見抄』『愚秘抄』『桐火桶』の三書は定家の筆でなくとも、こと実朝評に関しては、定家の意向を或る程度伝えていと思う。就中、

もののふの矢並つころふ籠手の上に霰たば
しる那須の篠原

の歌を評価する『愚見抄』の実朝主義とでも言うべき表現は立場のない人物が口にし得る言葉ではない。第二句、第三句の構成的な表現や体言止めは新古今の特徴だが、それでいて全体は明らかな万葉調である。題詠であることを忘れさせるリアリティがここにある。「もののふ」の手許から精緻な描写を展開しながらアングルを広げる構成力は実朝独自のものであろう。著名な

箱根路をわれ越えくれば伊豆の海や沖の小
島に波の寄る見ゆ

もまた同様である。「や」は一旦、視界を停止し、そののち焦点を絞り込む新古今の手法であるが、新古今の手法で万葉的感動を独自に再現した点に定家は改めて心を動かされた可能性がある。

最後になった。「箱根路を」の歌とともに

大海の磯もとどろに寄する波われてくだけ
てさけて散るかも

の歌について触れる。この歌も実朝の人生史の象徴のように「自然」と「人事」の合体と捉えられてきた。巨大な自然の

極限状況に自己を没入させ、同一化させる見事な描写力は万葉にない万葉的表現である。寄せては返す「波」という恒久的自然をも擬人化し「われてくだけてさけて散る」はかなきものとする、実朝の自然を観察する鋭い目が生きた歌と思う。定家が『新古今』から『新勅撰』に至る中で「幽玄」の理念による芸術至上主義的思想から、東国的な風土によるところの「人生のあはれ」を骨子とする歌風へとその目指すところが変化したとすれば実朝を高く評価したのも当然である。定家が有心体を確立していく過程に於いて晩年に仰いだのは万葉の歌風であり、実朝に贈った『近代秀歌』で説いた「寛平以往」の範囲を定家自ら万葉まで遡ったのだとすれば、ここに実朝の影響を認めぬわけにはいかない。

二 実朝の文学史的位相

古来、実朝は「万葉調の歌人」として文学史上の位置を保ったが、むしろ実朝独自の歌境は人間らしい情愛の心通う「中世的あはれ」に開かれていたと思う。その意味で実朝は新古今時代の副産物ではなく、殆ど「中世のバイオニア」としての位置づけも可能ではないだろうか。「世の中は」の歌は、実朝歌の魅力を語る上で根底に据えるべき一首との思いだが、同時に定家の評価をして「王朝」（中古）の最後の輝きであるとともに、「王朝」という一つの時代の終わりを告げ「中世」という新たな時代の幕開けを象徴する一首と位置づけた。